

報告・資料

## 衣服着装に関する高齢女性の意識 Elderly Women's Consciousness of Being Dressed in Clothes

小山京子

### 緒言

21世紀を目前に控え、日本は世界に類を見ない程のスピードで高齢化が進んでいる。総務庁統計局の1997年9月15日の推計人口によると、65歳以上の高齢者は総人口の15.6%、70歳以上の高齢者が10.3%である。

そして、国立社会保障・人口問題研究所の日本の将来推計人口によると、2015年には65歳以上の高齢者が人口の25%を占めると予測されている。男女別では、女性は65歳以上の人口の58.6%を占め、高齢になるほどその割合が高くなり、85歳以上では70.5%を占めている。

また、厚生省の「心豊かで活力ある長寿社会づくりに関する懇談会」は、「65歳以上」を高齢者とする考え方自体が現状に合っていないことを指摘して、高齢者の範囲を「70歳以上」ととらえ直す必要がある（厚生省老人保健福祉局老人福祉振興課 1997）、と提言している。

岡山県北部の美作地域も、全国平均を上回るスピードで高齢化が進み、岡山県毎月流動人口によると、1996年10月1日現在で65歳以上の高齢者は人口の23.7%を占めている。

このような中で高齢者への対応は、福祉、医療を始め、衣・食・住においてもそれぞれ研究が進められている。毎日の生活に不可欠の衣生活について、衣服が心身に大きな影響を与えることは、すでに問題提起されており（渡邊 1997）、障害を持つ高齢者の衣服についての研究は進みつつあるが、高齢婦人の衣生活に対

する意識や購買行動に対する研究は十分であるとはいえない。

そこで、健康的な生活を営んでいる高齢婦人の身体状況、衣生活の現状、衣服の関心・好み、衣服の入手について、どのような状況かを把握し、高齢婦人の衣服の問題点を明らかにして、より快適な衣生活を確立することを目的とする。

### 研究方法

1. 調査地域 岡山県北部（津山市，落合町，久米町，勝央町）
2. 調査対象者 70歳以上の健康な女性50名
3. 調査時期 1997年6月～1997年9月
4. 調査方法 質問紙法による面接調査
5. 色彩嗜好調査資料  
新配色カード175bと配色カード158a（日本色彩研究所）の中から75色を選び、6種類のトーン別（vivid, deep, soft, dull, light grayish, grayish）に、12色相（R, rO, yO, Y, YG, G, BG, gB, B, V, P, RP）と、無彩色のW, Gy-5、Bkをグレイ台紙（Gy-6）に配列した。カラーサンプルのサイズは3cm×4cmである。
6. 調査質問項目
  - (1)生活状況
    - ①家族構成
    - ②身体状況（体型観察・写真撮影）
    - ③外出状況
  - (2)衣服への関心

- ①着用服種
- ②衣服への興味・関心

(3)衣服の嗜好

- ①色調（トーン）の好み（調査色票使用）
- ②色相の好み（調査色票使用）
- ③着装方法の好み
- ④衿の好み（衿の種類呈示）
- ⑤袖の好み（袖の種類呈示）
- ⑥明きの好み（明きの種類呈示）

(4)衣服の入手

- ①入手方法
- ②購入者の状況
- ③購入対象店
- ④購入時の問題点

7. 分析方法

単純集計, クロス集計 ( $\chi^2$ 検定, t検定)

結果ならびに考察

1. 生活状況

調査対象者の年齢構成と家族構成員数は表1に示すとおりであり, 平均年齢は78.5歳である。年齢の変化により, 意識や行動に違いが生じると考え, 5歳毎に年齢を区切り, 70~74歳を1群; 75~79歳を2群、80~84歳を3群、85~89歳を4群, 90~94歳を5群とした。以下, このグループ分けで考察を行った。また, 平均家族構成員は3.28人であり, 「1人住まい」は1群が5人、3群が1人, 「夫と2人」は1群が9人, 2群が2人であった。4群、5群では全員が息子や娘の家族と同居している。

身体状況は体型観察を目的としているため, 写真撮影を可能な限り行い, 10cm方眼のボードの前で, 直

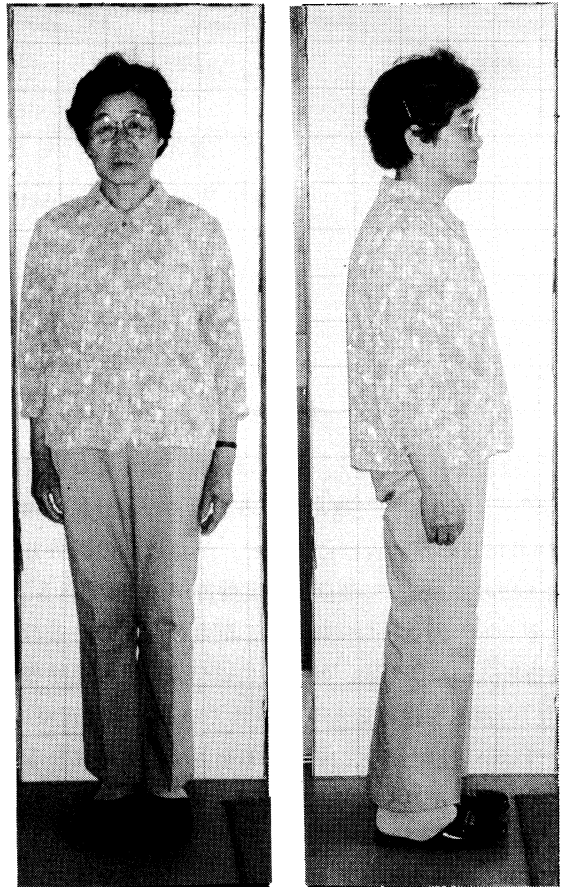


図1. 体型観察 (前面・側面)

立正常姿勢の前面と側面を撮影した (図1)。体型写真および視覚判定により, 高齢者の背面形状を主とした分類 (土井 1990) を参考にA, B, C, Dタイプ (図2) に分類した (表2)。Dタイプよりさらに著しい後湾がみられる者もあるが, これもDタイプに入れた。

1群ではAタイプが90.5%であるが, 4群, 5群ではAタイプが減りB, Dタイプが現れる。

外出状況については「よくする」, 「時々する」, 「ほとんどしない」, 「全くしない」の4段階尺度での評定結果を

表1. 調査対象者の年齢構成・家族構成員数

年齢 (歳)	家族構成員数									(人)
	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	
1群 70~74	5	10	1	3	1	0	1	0	0	21
2群 75~79	0	2	2	2	0	1	2	0	0	9
3群 80~84	1	1	3	3	0	0	0	0	0	8
4群 85~89	0	0	3	2	0	0	0	1	0	6
5群 90~94	0	0	4	1	0	0	0	0	1	6
計	6	13	13	11	1	1	3	1	1	50

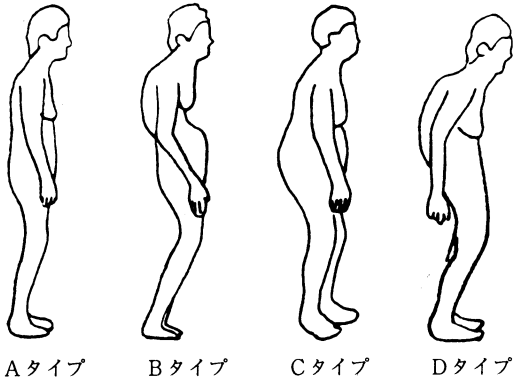


図2. 高齢者の背面形状を主とした分類

表2. 体型 (タイプ) (人)

	A	B	C	D	計
1群	19	0	2	0	21
2群	3	0	5	1	9
3群	4	0	3	2	8
4群	1	0	3	2	6
5群	2	1	1	2	6
計	29	1	14	6	50

表3-1に示す。「時々する」が20人で40%あり、次いで「よくする」が15人で30%である。4段階の評定項目の「よくする」に1点、「時々する」に2点、「ほとんどしない」に3点、「全くしない」に4点の得点を与えて数量化し、群別の評定平均値を出した。1群が1.5、2群が2.2、3群が2.3、4群、5群が2.7で、年齢が上がるに従って外出は減る傾向にある。各群間の平均値の差の

表3-1. 外出状況 (人)

	よくする	時々する	ほとんどしない	全くしない	計	$\bar{X}$	SD
1群	13	6	2	0	21	1.48	0.68
2群	1	5	3	0	9	2.22	0.67
3群	1	4	3	0	8	2.25	0.71
4群	0	2	4	0	6	2.67	0.63
5群	0	3	2	1	6	2.67	0.82
計	15	20	14	1	50		

表3-2. 1群の外出状況 (人)

家族構成	よくする	時々する	ほとんどしない	全くしない	計
1人	4	1	0	0	5
夫と2人	6	3	0	0	9
その他	3	2	2	0	7
計	13	6	2	0	21

検定を行ったところ、1群と2群 ( $p<0.01$ ), 1群と3群 ( $p<0.05$ ), 1群と4群 ( $p<0.01$ ), 1群と5群 ( $p<0.01$ ) の間に有意差がみられた。1群内では「よくする」が61.9%を占めており、殆ど毎日のように趣味や買い物等に出かけているようすがうかがえる(表3-2)。その中でも特に家族構成が「1人住まい」と「夫と2人」は他の構成に比べて「よくする」が多くみられる。4群、5群の「ときどきする」の中には、病院やデイサービスに通う者も含まれる。「全くしない」のは5群の1人である。外出状況と年齢群(1群と2~5群)をクロス集計し、 $\chi^2$ 検定の結果、有意差がみられた ( $p<0.01$ )。

## 2. 衣服への関心

着用服種として合(春・秋)、夏、冬の着用状況は、合、夏を問わずブラウスにズボンが殆どで、スカートは、合、冬とも同一人物の4人であった。ズボンは動き易く冬は暖かで、女性イコールスカートというスタイルは若い人と同様に減少しつつある。夏はスカートが7人に増え、キュロットスカートも5人と、ズボンより丈が短くすそ幅の広いものが好まれている。これは体熱放散を大きくし、涼しく過ごす工夫がされていると考えられる。また、ワンピースは合に1人、夏は9人であり、むし暑い夏を過ごすためにワンピースを着用しているようである。合、冬に着物(和服)を着用しているのは5群のみで、合に3人、冬に4人である。その内の3人は夏にワンピースを着用している。冬はブラウス、ズボンの上にセーター・カーデ

ィガンを着用する者が多いが、その上にはんこ(袖無羽織)、ひっぱり(上張り)など日本的な上着を着用する者もある。衣服への興味・関心は「非常にある」、「ややある」、「どちらともいえない」、「ややない」、「全くない」の5段階尺度での評定結果を表4に示す。「ややある」は27人で54%を占め、次

表4. 衣服への興味・関心 (人)

	非常にある	ややある	どちらとも いえない	ややない	全くない	計	$\bar{X}$	SD
1群	8	9	3	1	0	21	1.86	0.85
2群	2	3	4	0	0	9	2.22	0.83
3群	0	8	0	0	0	8	2.00	0
4群	1	3	1	1	0	6	2.33	1.03
5群	0	4	1	1	0	6	2.50	0.84
計	11	27	9	3	0	50		

いで「非常にある」が11人で22%である。5段階の評定項目の「非常にある」に1点、「ややある」に2点、「どちらともいえない」に3点、「ややない」に4点、「全くない」に5点の得点を与えて数量化し、群別の評定平均値を出した。1群が1.9、2群が2.2、3群が2.0、4群が2.3、5群が2.5で年齢が上がるに従って興味・関心は少なくなる傾向にあるが、各群間の平均値の差の検定を行った結果、有意差はみられなかった。全ての年齢を通して、衣服への関心は「ややある」傾向にある。1群は「非常にある」、「ややある」が17人で81.0%あり、まだまだ元気で衣服への興味・関心が旺盛なことがうかがえる。また、4群、5群においても「非常にある」、「ややある」が8人で66.7%を占めており、90歳前後になっても女性は衣服への興味・関心が高いことを示している。衣服への興味・関心と年齢群（1群と2～5群）をクロス集計し、 $\chi^2$ 検定の結果、有意差はみられなかった。

### 3. 衣服の嗜好

色調（トーン）の好みは表5に示す。grayishは19人

表5. 色調の好み (人)

	vivid	deep	soft	dull	light grayish	grayish	計
1群	1	1	2	6	9	2	21
2群	0	1	0	2	3	3	9
3群	0	0	1	0	2	5	8
4群	0	0	1	1	0	4	6
5群	0	0	0	1	0	5	6
計	1	2	4	10	14	19	50

で38%好まれ、次いでlight grayishが14人で28%であった。dullは10人で20%であり、この3種のトーンの好みの合計が43人で86%であった。1群ではdullとlight grayishが好まれ、2群はlight grayishとgrayish、3群から5群の合計は

grayishが14人で70%と特に好まれている。従来から高齢者の嗜好色調（近江 1987）とされている低明度低彩度の、灰味がかかった、くすんだ色を好む傾向が現れている。grayish, light grayish共にトーンのイメージは「地味」、「消極的」、「弱い」、「静か」等があげられ、年齢相応のトーンを考えていると思われる。色調（vividは出現数が少ないので省く）の好みと年齢群（1群と2～5群）をクロス集計し、 $\chi^2$ 検定の結果、有意差がみられた。（ $p<0.05$ ）

色相の好みは表6に示す。1番好まれている色相はP, V, Bの3色相であり、次いでG, gB, Gyである。色相の好みは青系から紫系に集中しており、色のイメージは「清澄」、「深遠」、「沈静」、「高貴」、「気品」、

表6. 色相の好み (人)

	R	r0	y0	Y	YG	G	BG	gB	B	V	P	RP	W	Gy	Bk	計
1群	1	0	1	0	0	2	0	3	3	3	5	1	1	0	1	21
2群	0	0	1	0	0	0	0	0	2	2	2	2	0	0	0	9
3群	0	0	0	0	0	2	1	0	0	1	1	0	0	3	0	8
4群	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	2	1	6
5群	0	1	1	0	0	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0	6
計	1	1	3	0	1	5	2	5	6	7	8	3	1	5	2	50

「優雅」、「温情」、「女性的」等があげられ、「顔うつり」、「日本古来の色」、「年齢相応」等の考慮も加わってこのような傾向になっていると思われる。ここでは無彩色（W, Bk）の好みがちと見かけられず、高齢者にとって無彩色は色が明確であるため、若々しい色として捉えられているのではないだろうか。また、若い女性に最も嫌いな色相としてあげられている紫（庄山 1997）が、高齢婦人に好まれていることは非常に興味深いことである。色相は、有彩

色12色を6色（赤系統、橙系統、黄系統、緑系統、青系統、紫系統）にまとめ、色相の好みと年齢群（1群と2～5群）をクロス集計し、 $\chi^2$ 検定の結果、有意差はみられなかった。

着装方法の好みとしては、着用服種の好みとほぼ同じで、ブラウスにズボンという組み合わせが非常に多かった。これはやはり着易さ、動き易さに起因していると思われる。

衿の好みは図3に示すように6種類の衿・衿ぐり（オープン・シャツ・スタンド・リボン・V・ラウンド）を示し、好きな衿・衿ぐりの調査結果を表7に示す。圧倒的に衿なしより衿のあるものを好み、その中でも「シャツカラー」が26人で52%と好まれている。5群では4人が「オープンカラー」の好みをあげており、超高齢者になると体型も大きく変化し、背柱が変形して後湾の状態になり、首が前に出て来るため、首の前部が衿ぐりに当たるようになるので、首のつかえないデザインを好むようである。

袖の好みは図4に示すように3種類の袖（セットイン・ラグラン・ドルマン）を示し、好きな袖の調査結果を表8に示す。「ラグランスリーブ」を好む者が26人

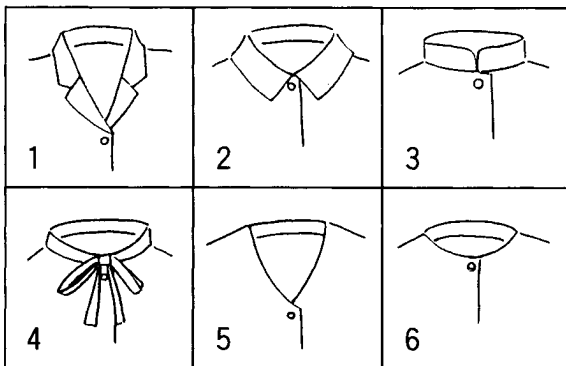


図3. 衿の種類

	オープン	シャツ	スタンド	リボン	V	ラウンド	計
1群	4	10	1	3	1	2	21
2群	1	6	1	1	0	0	9
3群	1	6	0	0	1	0	8
4群	2	3	0	1	0	0	6
5群	4	1	0	0	1	0	6
計	12	26	2	5	3	2	50

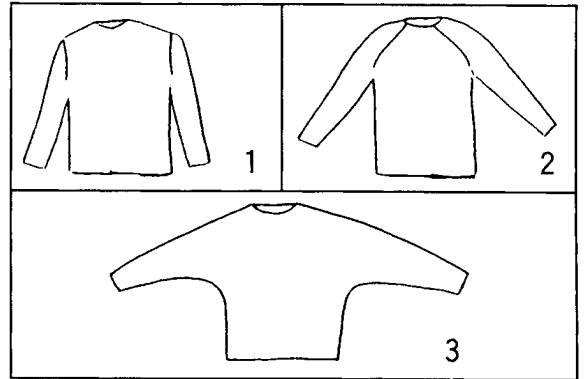


図4. 袖の種類

	セットイン	ラグラン	ドルマン	計
1群	12	9	0	21
2群	2	6	1	9
3群	4	3	1	8
4群	1	5	0	6
5群	2	3	1	6
計	21	26	3	50

で52%と過半数を超え、次いで「セットインスリーブ」が21人で42%である。1群では12人の57.1%が「セットインスリーブ」を好んでいるが、2群から5群は「ラグランスリーブ」の方を17人の58.6%が好んでいる。「セットインスリーブ」は機能性のみではなく装飾性も兼ねており、動きがやや不自由であるのに対して、「ラグランスリーブ」はゆったりとしていて動き易いためであろう。

明きの好みは、ワンピースと上衣に分けて行った。ワンピースの明きの好みは図5に示すように3種類（全開・腰まで・胸まで）を示し、好きなワンピースの明きの調査結果を表9に示す。ワンピースの明きは圧倒

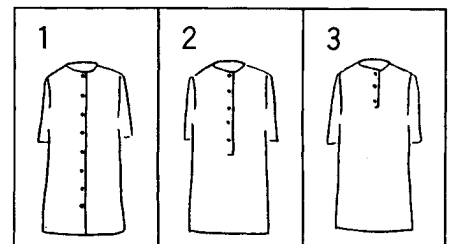


図5. 明きの種類 (ワンピース)

表9. 明きの好み(ワンピース) (人)

	全開	腰まで	胸まで	計
1群	0	20	1	21
2群	0	7	1	8
3群	0	8	0	8
4群	0	5	0	5
5群	0	6	0	6
計	0	46	2	48

的に「腰まで」を好み、46人で95.8%である。「全開」は着脱には便利であるが、ボタンかけ、すそがばらつく等の不便さがあり、また、「胸まで」は着脱の不便さがあげられるため好まれていない。

上衣の明きの好みは図6に示すように3種類(全開・胸まで・なし)を示し、好きな上衣の明きの調査結果を表10に示す。上衣の明きは大半が「全開」を好み、35人で70%であった。次いで「胸まで」の明きを好む者が12人で24%である。「明きなし」を好む者は3人で6%であるが、指先が不自由なため「明きなし」を好んでいる。「全開」を好む者が多いのは、ワンピースの「腰まで」と同様に着脱の便利さがあげられる。

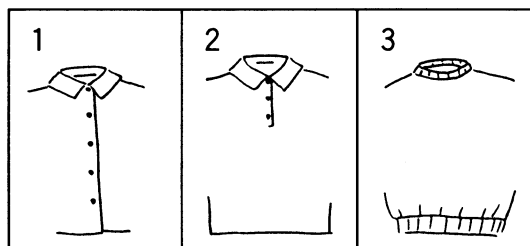


図6. 明きの種類(上衣)

表10. 明きの好み(上衣) (人)

	全開	胸まで	明きなし	計
1群	16	3	2	21
2群	7	2	0	9
3群	4	4	0	8
4群	4	1	1	6
5群	4	2	0	6
計	35	12	3	50

#### 4. 衣服の入手

衣服の入手方法を4種類(購入・オーダー・手作り・もらう)示し、入手方法の調査結果を表11に示す。入手方法として

表11. 衣服の入手方法 (人)

	購入	オーダー	手作り	もらう	計
1群	16	1	0	4	21
2群	6	0	0	3	9
3群	4	0	1	3	8
4群	4	0	0	2	6
5群	4	0	0	2	6
計	34	1	1	14	50

「購入する」が34人で68%と最も高く、次いで「もらう」が14人で28%であった。「オーダー」、「手作り」が各1人で2%と非常に少なく、戦前、戦中、戦後において殆ど手作りをしたであろう世代においても、もはや手作りの衣服は考えられなくなっているようである。

購入者の状況は表

12に示す。「自分で購入する」が31人で72.0%で、「娘」・「嫁が購入する」が各6人で14.0%であった。1群から3群までは「自分で購入す

表12. 購入者の状況 (人)

	自分	娘	嫁	計
1群	20	1	0	21
2群	5	0	1	6
3群	5	1	0	6
4群	1	2	2	5
5群	0	2	3	5
計	31	6	6	43

る」が30人で90.9%であるが、4群、5群は「自分で購入する」が1人で10%で、「娘」・「嫁が購入する」が9人で90%であった。80歳代前半までは自分が購入する行動力があるが、それより高齢になると家族が購入している。家族の中でも嫁の他に、娘とのつながりが強いことがうかがえる。

購入対象店について、美作地域で婦人の衣料品を扱っている小売店は、デパート、スーパーストア、婦人服専門店、衣料品店があり、さらに最近増加傾向にある通信販売を加えて5種類を示し、よく購入する店の

表13. 購入対象店 (人)

	衣料品店	スーパー ストア	デパート	専門店	通信販売	計
1群	9	4	2	2	4	21
2群	3	2	0	1	0	6
3群	0	3	1	1	1	6
4群	3	1	1	0	0	5
5群	5	0	0	0	0	5
計	20	10	4	4	5	43

調査結果を表13に示す。よく購入する店は「衣料品店」の20人で46.5%であり、次いで「スーパーストア」が10人で23.3%であった。「デパート」、「専門店」、「通信販売」はほぼ同数であった。「通信販売」による購入の5人の内4人は1群であり、高齢者の中の若い層には少しずつ「通信販売」による購入が広がっているようすがうかがえる。高齢者の衣服は「デパート」、「専門店」より「衣料品店」に品揃えしてあることが多く、近所の「衣料品店」は長年のつきあいや価格の面での買い易さ等があげられる。また、大阪市、吹田市、京都市などの都市部では「デパート」での購入が一番にあげられているが（上野 1994）、美作地域には「デパート」は津山市に1店のみで、「専門店」も限られている。もう少し地理的条件が良くなれば、これらの店での購入も増えるであろう。

購入時の問題点としてデザイン、色・柄、サイズに関して「非常に満足」、「やや満足」、「どちらともいえない」、「やや不満」、「非常に不満」の5段階尺度での評定結果を表14に示す。5段階の評定項目の「非常に満足」に1点、「やや満足」に2点、「どちらともいえない」に3点、「やや不満」に4点、「非常に不満」に5点の得点を与えて数値化し、群別の評定平均値を出したが、値はすべて2.0であった。デザインに関しては「やや満足」が40人で93.0%となり、どの群においてもおおむね満足している。色・柄に関しては「やや満足」が38人で88.4%となり、デザインと同様にどの群においてもおおむね満足している。サイズに関しては「やや満足」が31人で72.1%となり、他の項目より少なくなっているが、「非常に満足」が6人で14.0%、「どちらともいえない」も5人で11.6%となっており、1群内でのサイズの

満足度に多少ばらつきがみられる。1997年2月、JIS成人女性用衣料サイズが改正され、体型は従来のA、Y、B体型がA、Y、AB、B体型に変わった。従来のB体型がAB体型となり、中・高齢者のニーズに対応するためヒップが大きいB体型を新設した。身長区分は、従来のR、P、TがR、P、PP、Tに変わり、Pより小さいPPが新設され、身長が小さくなっていく高齢者への対応がなされている。デザイン、色・柄、サイズともに「非常に不満」はなく、「やや不満」も殆どない。購入時の問題点のデザイン、色・柄、サイズと年齢群（1群と2～5群）をクロス集計し、 $\chi^2$ 検定の結果、デザイン、色・柄、サイズ共に有意差はみられなかった。

表14. 購入時の問題点—デザイン (人)

	非常に満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	非常に不満	計
1群	0	20	1	0	0	21
2群	1	5	0	0	0	6
3群	0	6	0	0	0	6
4群	0	4	0	1	0	5
5群	0	5	0	0	0	5
計	1	40	1	1	0	43

購入時の問題点—色・柄 (人)

	非常に満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	非常に不満	計
1群	0	20	1	0	0	21
2群	2	4	0	0	0	6
3群	0	5	1	0	0	6
4群	0	4	1	0	0	5
5群	0	5	0	0	0	5
計	2	38	3	0	0	43

購入時の問題点—サイズ (人)

	非常に満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	非常に不満	計
1群	4	14	3	0	0	21
2群	1	5	0	0	0	6
3群	0	4	1	1	0	6
4群	1	4	0	0	0	5
5群	0	4	1	0	0	5
計	6	31	5	1	0	43

## 要 約

高齢婦人の衣生活についての問題点を明らかにし、より快適な衣生活を確立することを目的に、岡山県北部に住む70歳以上の高齢婦人を対象として面接調査を実施し、その意識を分析した結果、次のような傾向が得られた。

- (1) 調査対象者の約4割は70歳から74歳の1群であり、家族構成員数は2人から3人が多かった。体型は1群では背柱の後湾はやや認められるが、標準体型に最も近いAタイプが多く、年齢が上がるにつれて前傾姿勢、背柱の後湾、下肢の屈曲などのDタイプが現れている。外出状況は1群は「よくする」人が多く、中でも「1人住まい」、「夫と2人」の者は、他の家族構成の者よりよく外出している。1群とそれ以上の年齢群とでは外出状況に有意差が認められ、70歳代前半は活動的であることがうかがえる。
- (2) 着用服種は殆どがブラウスにズボンで、スカートを好む者は少なく、和服を着用する者は90歳から94歳の5群のみであった。衣服への関心・興味は1群では約8割があり、年齢が上がるに従って少なくなっているが、90歳前後でも関心は高く、全ての年齢を通して「ややある」傾向にある。
- (3) 色調の好みは低明度低彩度のgrayish, light grayish, dullなどで、1群はlight grayish, dullが多く、それ以上の年齢群はgrayishが大半で、年齢が上がるに従って、灰色がかかった色調を好んでいる。1群とそれ以上の年齢群では、色調の好みに有意差が認められた。色相の好みは青系から紫系に集中しており、色調と合わせて地味で落ちついた色を好んでいるといえる。衿の好みは「衿なし」は少なく、「シャツカラー」が過半数を占め、次いで「オープンカラー」となっており、「スタンドカラー」、「ラウンドネック」は高齢群には全くみられなかった。袖の好みは「ラグランスリーブ」が過半数を超え、次いで「セットインスリーブ」が好まれている。1群では約6割が「セットインスリーブ」を好み、それ以上の年齢群は約6割が動き易い「ラグランスリーブ」を

好んでいる。明きの好みはワンピースでは圧倒的に「腰まで」を好み、「全開」は全くみられなかった。上衣では7割が「全開」を好み、一部ではあるが指先が不自由なため「明きなし」を好む者もいる。

- (4) 入手方法は「購入する」が約7割で、「オーダー」、「手作り」は殆どみかけられない。購入者の状況は「自分で購入する」が約7割で、1群から3群までは約9割が自分で購入しているが、4群、5群は9割が娘や嫁が購入している。購入対象店は「衣料品店」が5割弱と多く、次いで「スーパーストア」であった。地理的条件のため都市部に比べて「デパート」、「専門店」が少なくなっている。購入時の問題点としてデザイン、色・柄、サイズに関してはおおむね満足しているが、1群内ではサイズの満足度に多少ばらつきがみられる。
- (5) 装うことは、自分らしさを表現する大切な手段であり、高齢者が「好きな服」を着ることは、「生きがい」、「豊かな生活」にも通じる。今回の調査にみられた衣服のデザイン、色、サイズ、機能上の要望を満たし、体型に合う衣服が、県北の衣料品店をはじめデパート等に品数多く出されることが必要と考えられる。さらに、今回の衣料サイズ改正が、高齢者衣料のサイズの問題点解消に成果が上がることを期待している。今後の課題として、今回調査した、タイプ別体型の身体計測を行って体型を把握し、それぞれに適合した衣服製作、着装評価を行い、快適な衣服の要素を明らかにしていきたい。

## 引用文献

- 土井サチヨ (1990) 『体型と衣服』同文書院、東京、61-64
- 厚生省老人保健福祉局老人福祉振興課 (1997) 『新しい高齢者社会の創造』中央法規出版、東京
- 近江源太郎 (1987) 『造形心理学』福村出版、東京
- 庄山茂子、青木迪佳、今岡春樹 (1997) 女子学生の季節別色



彩嗜好に関する傾向分析, 繊維製品消費科学 38 (10),  
579-586

上野裕子 (1994) 老人衣料および高齢社会における衣生活に  
ついて, 光華女子短大研究紀要32, 19-31

渡邊敬子, 高部啓子, 大村知子 (1997) 高齢女性における衣  
服の身体適合に関する意識, 日本家政学会誌 48 (10),  
893-902

(1997年12月1日 受理)